

「みんなの時代」にうごめくヤンキー、ネット右翼、依存から脱する人々

昨年12/22朝日朝刊でのインタビューで社会学者の小熊英二は、政治や民主主義の感覚が欧米と日本で異なることについて、「ドイツなども1960年代までは日本と同じ『お任せ民主主義』型でした。人々は政治に参加する気はないのに見返りは求め、陰で不満をいう。ところが社会がある程度豊かになると、発言したい、参加したい、決定権が欲しいといったモノ以外への欲求が高まります。さらに70年代の石油ショック以降は雇用も家族も不安定になり、自分で考えて動かなくてはどうにもならなくなった。だから意識が変わったのです。ところが日本は80年代に、欧米で衰退した製造業を引き受けて経済成長できたため、例外的に変わらなかった。しかし、もう限界です」と説明する。

ドイツでは自分たちが変わらなくてはやっていけなくなったが、日本では自分たちが変わらなくてもやっていけたから、同じ調子でやってきたが、3・11以降はもうやっていけないということだが、我々が変わらずにつづいた「日本の民主制度は、開発独裁型の政府が形だけ導入したという性格のものでした。それが行きついた姿が今の地方議会です。元高級官僚の知事が出す案件がオール与党で何でも通る。住民は無関心で投票率も低いところでは2割。不満を言いつつも従っているのは、知事が中央からカネを引っ張ってくるからです。正統性が低いからカネしか納得させる手段がない。いまは国会の地方議会化が進みつつありますが、同じことはできません。」巨額の債務で破綻するからだ。

変わらざるをえなくなったドイツ人は自分で考えて動くという自立の方向に向かっていったのに対して、変わらない日本人は依存の度合を強めていったとみなすことができる。しかし、3・11以降の日本にも変化が生じてきたと小熊は言う。「この1年半、いろいろなデモに参加しました。創意工夫にあふれたプラカードや主催者の運営など、人々の成長は著しい。政治や経済の勉強もして討論もするからどんどん賢くなります。参加を経験し、自分が動くと何かが変わるという感覚を持つ人がたくさん出てきたことに希望を感じます。運動の意義は、目先の政策実現だけではありません」

「幸い今のところ、不満は諸外国のように犯罪や麻薬、暴動といった形でなく、運動という形で出てきています。官庁街でデモをやっても警察との衝突などない。整然と『再稼働反対』を叫んで午後8時にはピタッと引き揚げ、後にはごみ一つ落ちていない。自己規律ある形で政治を自分に近づけようとしている。それに政党や政府が応えなければ、次が恐ろしいかもしれません」

3・11以降の良き徴候については、大阪大准教授の平川秀幸も12/20朝日朝刊のコラムで、政府の変化に呼応して《私たちの姿勢にも「萌芽」は見える。選挙の投票率の低さからは、政治に幻滅し、見限った人こそ多かった印象だ。だが、震災復興や原子力問題を通じて、これまであまりに政治家任せ・専門家任せだった自分を反省し、社会や政治、自分たちの未来に関心を払い、自ら考え、議論し、政治に注文するだけでなく自分たちで担えることも探り続ける人々もまた増えているのではないか。選挙の結果としては表れずとも、このような変化こそ、私たちが最も絶やしてはならない3・11後の萌芽であろう。》と指摘する。

『フクシマ』論 著者の開沼博は選挙前の12/14朝日朝刊インタビューで、二酸化炭素の排出量増加の問題が絡む化石燃料は避けて自然エネの話しかせず、《化石燃料の輸入による巨額の貿易赤字や核燃料サイクルの話》も避け、《合意できない話は無視し、社会をリセットするような話ばかりする状況》では、貧困の解消と引き換えに原発を押しつけてきた構造と向き合うことはできないと言う。選挙戦について福島の人たちは「公約からは何も読み取れないことを地元の人は気づいている。メニューを出されたが、どれも食べたくないと言うのが今の状況ではないか。どれも食べたくないから、なじみの店に行ってしまう」。つまり、何も変わらない。「これまで依存していたものが崩れたからといって、別の物に依存しようとするれば、同じような弊害を生み出す。福島の人でも太陽光や洋上風力の発電施設はそれほど雇用を生まないし、ハコモノ以下ではないかと気づいている」と指摘し、人々が依存せずに生きていけるような環境をつくりださないかぎり、リスク分配社会の中で人々の依存志向も強まることを予見する。

日本社会がこれまでの依存体質から抜け出すことのできない根強さを感じさせる一方で、何かが変わる感覚が「萌芽」として出てくるのが見出されるなかで、冷戦時代の政党としての役割を終えたはずの自民党が政権に復帰してきたことを、精神科医の斎藤環は 12/27 朝日朝刊で「自民党はもはや保守政党ではなくヤンキー政党だと考えた方が」よいと語る。彼の言うヤンキーは非行や暴力とは関係がなく、「日本社会に広く浸透している『気合とアゲアゲのノリさえあれば、まあなんとかなるべ』という空疎に前向きな感性のことで」あり、「自立」をうたう自民党の政権公約には、「気合が足りないから生活保護を受けるようなことになるんだ、気合入れて自立しろという、ヤンキー的価値観が前面に出ています。経済やふるさとを『取り戻す』と言っても根拠は薄弱で、要は気合があれば実現できるという気合主義を表現しているに過ぎません」

天賦人権説を否定していると話題になっている自民党の憲法改正草案も、「義務を果たした人間にだけ権利が与えられる、秩序を乱さない範囲内で自由を認めるといった発想は、まるでヤンキー集団の掟おきてのようで」あり、安倍が月刊誌に発表した政権構想「新しい国へ」にしても、「古い国に戻そうとしている」だけで、推奨する「伝統的子育てには虐待などの問題も指摘され、それがすべて良かったなんて完全なフェイクです。ヤンキーは伝統を大事にするというイメージがありますが、それはフェイクとしての伝統で、さかのぼってもせいぜい3代前。」で、本当の伝統など理解できていない。

「ヤンキーには、『いま、ここ』を生きるという限界があって、歴史的スパンで物事を考えることが苦手です。だから当座の立て直しには強いけれども、長期的視野に立った発想はなかなか出てこない。自民党が脱原発に消極的なのは、実は放射能が長期的に人体に及ぼす影響なんて考えたくないからじゃないか。」自民党は「あえて知性を捨てて」おり、「保守は知性に支えられた思想ですが、ヤンキーは反知性主義です。言い方を変えれば、徹底した実利思考で『理屈こねている暇があったら行動しろ』というのが基本的なスタンス。主張の内容の是非よりも、どれだけきっぱり言ったか、言ったことを実行できたかが評価のポイントで、『決められない政治』というのが必要以上に注目されたのもそのせいです。世論に押されて実はヤンキー化しているマスコミがその傾向を後押しし、結果、日本の政治が無意味な決断主義に陥っています」

全国の中学校で流行している、「北海道の中学校で不良を立ち直らせたという伝説の『南中ソーラン』」を取り上げて、「ソーラン節をアップテンポにした踊り」の「衣装は『竹の子族』風、踊りは『一世風靡セピア』風と極めてヤンキー度が高く、薄い毒を予防的に注入して強力な毒になるのを防ぐというワクチン的な効果を発揮し、思春期の子どもの反社会性をうまく吸収しています」「そうやって成長した若者たちは地元に残り、地元の祭りの担い手となり、『絆』を重んじるヤンキー的な保守として成熟し、うまくすれば地域の顔役になったり地方議員になったりする。要するに、不良になりそうな連中がソーラン節や祭りによって保守にロンダリングされるのです。こんな強力な回路は日本以外にはありません。しかもこの回路は治安維持に役立っている面があるので簡単には手放せません」

足場がここにあるから自民党は強く、「政権交代が起きても地方議会は自民党が圧倒的に強い。ヤンキーは行動力があるので、選挙となればどぶ板でフル稼働する。ニヒリスティックに棄権する知性派なんて選挙では何の役にも立ちません」。自民党は積極的ではなかったにせよ、「サイレントマジョリティーたるヤンキー層」の支持があったから圧勝したので、「もはや知性や理屈で対抗できる状況にはありません。」と言うが、同欄の隣で漫画家の小林よしのりは斎藤の注目するヤンキー層を「ネット右翼」と見ている。「わしは漫画で安倍氏を批判しているから、わしがネットで生放送をすると大挙して押し寄せ、中傷のコメントで画面を埋め尽くしてしまう。まるで暴走族だよ。現実との接点が乏しいから、陰謀論にもはまりやす」く、「今、愛国心を体現する政党があれば、リベラルと呼ばれるだろうな。共同体を失って砂粒のようにばらばらにされ、他人に認められたい願望がまったく満たされぬ。そんなネット右翼のような人間たちの個をどう安定させるか。それを政治家がやらなければならないのに、安倍氏は逆にネット右翼に癒やされている。情けないよ」と結ぶ。

ヤンキーにしても、ネット右翼にしても、「みんなの時代」の中でのより強力な結集であろうとする「みんな」の一形態にすぎないように感じられ、どの勢力も3・11以降に自分が変わろうとする人たちと同様に、突出することはありえないだろう。